砂

観世流改訂謡本

内 一

高砂

解題

阿蘇の宮の神主高砂の浦にて相生の松(高砂の松、住吉の松)の精に逢ひ、又住吉に至りて住吉明神の來現を拜することを作れり。夫婦和合、壽命長遠、國土安穩等の意を述べたるめでたき謠なれば、社寺の靈驗を說くに止りたる他の神事能と異り、脇能中隨一の曲として古來斯道に尊まる。世阿彌の作にして古名を相生松といへり。

能之小書

能の小書に太極、流シ八頭、八段之舞、祝言之式あり。八段之舞の時は舞臺正面に松の作物を出す。

眞之脇能と云ひて脇能中の最も重きもの、祝言中の祝言なれば、謠の位も極めて壯重崇高にとり、長閑なる間に聲緩みなく、節扱ひも剛吟中の剛吟たるべし。

謠ひ方梗概

シテ 前は老樹の精にて小牛尉の面をかくる老人なれば、尉物中にても位殊に重き心あるべし。總じてかゝるシテは細節に泥むべからず。**先づ眞之一聲**の出は調子を抑へて節扱を大きく、靜にゆつたりと謠ひ、松風颯々たる韻致あるべし。**サシ**は改めて稍さらりと扱ひ、**下歌**にて又調子を更へ、**上歌**は暢び〱といかにも長閑に謠ふ。此上歌の「處は高砂の」の返し一句はツレのみに謠はせてシテ謠はず。ワキとの問答は位を保ちて嚴かに、又「高砂住の江」の連吟聊か氣をかけて謠ひ、「昔の人の」以下前よりは少しづゝ位を進め、懸合は漸次詰める心なるべし。次の**サシ**は地と離れて確りと謠ふが宜し。**ロンギ**は地よりも稍靜に位を保ちて謠ふ。**後シテ**は前と異り堂々として謠大きく神舞物の趣を表すべし。殊に出の「我見ても云々」はサシの調子にてさらりと緩み無く而も剛健に謠ふを要す。以下地との懸合此要領にて謠ふ。終の**ロンギ**は少し乘り心にて稍賑やかに强々と謠ふ。

ツレ 老嫗なれば餘り調子を高めざるが宜しけれども、獨謠ふ所は稍輕めにさらりと運ぶ。シテと連吟の所は凡てシテに從ふ。

ワキ 能にては三人なれども素謠は一人にて謠ふ。此ワキは由緒ある神職なれば常の旅僧などの如く輕やかには謠はず。殊に重き脇能なれば位を十分に取りて淸く淀み無く謠ふ。**次第**は旭の昇るが如くあるべし。シテとの掛合には少し位を捨てゝ一曲を引き立たしむべし。**待謠**は春の舟行を敍したる道行なれば其心にて長閑に滯り無く謠ふ。此待謠を小謠に謠ふは僻事なり。

地 初同「四海波靜に」の一章は健かに淀み無く立板に水を流すが如き概あるべし。此一章は常に祝言の小謠に謠はる。婚禮の席にては返しを忌み「ゆたかなる」に續けて後の「君の惠ぞ有難き」を謠ひ收むるを古き例とせり。**クリ**は節無き所をさらりと運び、節ある所を稍大きく謠ふ。「打カケ」とある記入は能の節大小鼓の打カケを聞きて謠ひ出すが故なり。**クセ**は「姿ならずや」までを序の位にて稍靜に確りと謠ひ、以下シテの上ゲ端までを破の位にて少し運びを附け、以下クセドメまでを更に進みて急の位に謠ふ。**中入地**は「うち乘りて」より少し運び、「出でにけりや」と確かり謠ひとめて一寸拔き、返しより鎭めて謠ふ。後は「西の海」を一聲の調子にて大きやかに强々と張つて謠ひ、以下シテよりも少し運んで乘り合ひ好く謠ふ。**ロンギ**は調子好く引き立てゝ謠ふべし。**キリ**は健かにさらりと蟠り無く喜びの心充ち滿ちたる樣に謠ひ收む。「千秋樂は」の小謠は能の附祝言を始め喜びの席に謠はるゝものなり。

注意すべき謠ひ方

九枚裏の「千年の翠」の引は太鼓に松根頭といふ手のある所なれば、能にて充分に引き越して謠ふ。素謠にても其心を以て引を少しく大きやかに謠ふべし。

辭解

日も行く末ぞ 云々 旅衣の緣により紐の音を借りて日もと續け、更に光陰の行くと旅路を行くとに懸けて日數の久しきを叙す。**旅衣末遙々** 云々 此一章は衣の緣語を辭句の綾とせり。遙々(張)、立つ(裁)、浦(裏)、春(張)、來(著)ぬらん、播磨(張)、皆衣の緣なり。**尾上の鐘** 千載集に「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらむ」とあるを引く。大江匡房の歌なり。此歌後文にも引きたり。歌の詞は單に山の上の鐘の聲を聞きて曉方の霜の置き渡りたるを思ひ遣りたる心にて、高砂と云ひ尾上と云ふも確と地名を指して云ひたるに非れども、後世此歌を解く者皆播磨の地名として解したり。此曲もこれに從へり。**誰をかも** 云々 古今集に「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」。歌の意は老い長らへて舊知は皆亡じ、獨互に慰とするに似合はしと思ふ高砂の松も昔よりの友ならねば今は誰をか知る人と賴まんとなり。藤原興風の歌なり。高砂といふ語は古今集以前のものに見當らざれども、古今集には其歌も多く、取り分き其尾上の松は此集以後年久しき物の譬に引かれたるが多し。**落葉衣** 落葉の散りかゝりたる衣、浦風の緣にて落葉と云ひかく。**かくなるまで** 落葉搔くを斯くに懸けたり。此高年になるまでの意。**生の松に** 新續古今集に「うきこ

とは色も變らぬ同じ世にあはれいつまで生の松原」とあるを借る。生の松原は筑前の名勝なり。**高砂住の江の松に相生の名あり**古今集の序に「高砂住の江の松もあひおひのやうに覺え云々」とある故かく云へり。あひおひとは相追の意にて、此序の詞は高砂の松、住の江の松なども、我が齢と相追ひ相競ふやうに思ひ云々といふ意にて、同集に收めたる歌の種々の姿を書き列ねたる中の一つなり。同集巻第十七に「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代經ぬらむ」、「住吉の岸の姫松人ならば幾代か經しとはましものを」、「斯くしつゝ世をや盡さむ高砂の尾上に立てる松ならなくに」(以上何れも讀人知らず)及前掲「誰をかも」の歌などと一所に出でたり。これらは年久しきものとせられたる住の江の松、高砂の松をおのれ〳〵の齢に引き較べたるものなれば、其序に斯く書きたるなり。それを後世誤りて相生又は相老の意に解したるが適々此謠曲著想の基礎となりたるものにて、此曲は始終共に生ひ立ち共に老いたる二所の松として扱ひたり。反りて興味あることゝ云ふべし。住の江は住吉の一名。**古今の序**前掲古今集の序、古今集は後醍醐天皇の御時、敕に従ひて紀貫之、凡河内躬恒等の撰びし歌集、敕撰集の嚆矢なり。**尉、姥**老翁老女**津の國住吉**津の國は攝津の古名、住吉は今の大阪府下東成郡住吉村、墨江村、安立町附近一帶の地なり。**申さ給へ**申させ給へ。**うたての仰**けしからぬ御詞。**ド**「に候」の約りたる語。**妹背**夫婦**高砂と いふは上代の**云々口碑によれば、相生の松とはめでたき祝の意にて、高砂とは昔の萬葉集を指し、住吉とは今の古今集の時代を指す、又松といふ詞に物の盡きざる意を寓し、古今共に榮えの同じきを相生と云ひて御代を壽きたる譬喩なりといふ意なり。古今秘説の説を引きたるなり。延喜の代を今此御代と云へるも古今集の時代に立ち歸りたる心を以て昔の人の口吻を借りたるなり。**不審春**不審の晴るゝを春に云ひ懸く。**光和ぐ**和光同塵の意を借り用ひ、其縁にて西と云ひ懸く。**四海波靜に**後拾遺集の序に「わが君天下しろしめしてより此方四つの海波の聲聞えず云々」、又夫木集に「四つの海波靜なる御代なれば云々」、天下泰平の意。**時つ風**潮時の潮に伴ひて發る風。**枝を鳴さぬ**王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條」とあるを引く。條は枝なり。**逢ひに相生**泰平の代に逢ふ意の逢ひに韻を重ねて相生の語を續く**ことも愚や**詞に出して云ふも愚なる程顯著なる事よの意**それ草**

木以下クセドメまで松を賞讃したる詞を列ぬ。陽春暖き春。南枝花始めて開く和漢朗詠集に「誰言春色従レ東到、露暖南枝花始開」時をわかず他木の如く氣節の變化に支配せられず。四の時春夏秋冬一千年の色和漢朗詠集に「十八公榮霜後露、一千年色雪中深」十廻本朝文粋の大江朝綱の文に「松花之色十廻、豈唯天意乎」。言の葉草和歌生きとし生ける物あらゆる生物敷島のかげに寄る敷島とは和歌の意。あらゆる生物が其かげに寄るとは、古今集の序に「花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば生きとして生けるものいづれか歌をよまざりける」とあるを引けるなり。長能が詞藤原長能は拾遺以下歴代の集に出でたる和歌の作者なり。其著なりといふ私記に「和歌はこれ五行の體なり、詞に出すを歌とし、心に知れるを體とす、春の林の東風に動き、秋の蟲の北露に鳴くも皆和歌の體に洩れず、有情非情ともに歌の道をばおこすなり」とあるを引く。

十八公の粧、千秋の緑前掲和漢朗詠集の「十八公云々」の句意を引く。十八公は松字の分解。昔呉の國の丁固と云ふ者夢に腹上に松の生ひたるを見て十八歳の時公となりし故事あり。始皇の御爵秦の始皇雨を樹下に避け其樹に五太夫の位を授けたる故事。眞なり成程の意松の葉の云々古今集の序に「松の葉の散り失せずしてまさきのかづら長く傳はり」とあるを引く。まさきのかづらは、まさきづらとも云ふ蔓草の一種、長き譬に用ふる詞。土も木も太平記に出でたる紀朝雄の歌「草も木もわが大君の國なればいづくか鬼の栖なるべき」とあるを借る。此歌初句「草も木も」なるを謡曲には皆「土も木も」として引歌とせり。睦ましと云々伊勢物語に前掲古今集の「われ見ても」の歌に續けて出でたる歌。詞書に「御神現形し給ひて」とありて「睦ましと君は白波みづ垣の久しき世より祝ひそめてき」、みやつこ神の仕人西の海云々續古今集に出でたる卜部兼直の歌「西の海やあをきが原の汐路より現れいでし住吉の神」とあるを借りて後シテ住吉明神の來現の謡とす。此歌の住吉は九州なり。淺香潟玉藻刈る淺香潟は昔攝津住吉にありし浦なれども、地勢變じて今は和泉國泉北郡に屬し、五箇莊村として僅に面影を存す。萬葉集に「夕されば汐みちくなる住吉の淺香の浦に玉藻刈りてな」、又新續古今集に「身にしめと吹きにけらしな玉藻刈る淺香の浦の秋の初風」などあるにより、玉藻刈ると續けたり。松根によ

つて云々 本朝文粋の橘在列の文に「倚二松根一而摩レ腰、千年之翠滿レ手、折二梅花一而挿レ頭、二月之雪落レ衣」とあるを列ぬ。**影向** 形を現して神の出現すること。**神遊** 神の舞樂 **舞姫** こゝにては神の舞樂を助けて或は舞ひ或は歌ふ多數の舞姫。**青海波** 以下様々の樂の名を列ねて神の舞樂を叙す。青海波は曲名、松影の海に映るを樂の名に見立てゝ興ずるなり。唐樂はもと支那樂なれど傳來以來舞樂として最盛に行はれしものなり。一越調以下十二曲調備はりたり。**還城樂** 唐樂の名 **小忌衣** 大嘗會新嘗會などに用ゐる祭服なれど亦豊明節會にも用ゐるに依り此に引く。風雅集に「忘れずよ豊のあかりの小忌衣著つゝなれにし昔なれども」。**さす腕** 舞の手の稱、さす手。**をさむる手** 舞の手の稱、引く手。**千秋樂** 唐樂の名、民を撫でと續けたるは豊年の意に懸けて民を慰撫する由に云ひなしたるなり。**萬歳樂** 唐樂の名。命を延べと續くるは樂名をさながらに長壽延命の祝言としたるなり。**颯々の聲** 松風の聲を表とし、舞の袂の飜る様を裏をして歡樂極まり無き所に一曲の終を結ぶ。

裝束附

前シテ（尉）
面小牛尉、尉髮、襟淺黃又は樺、着附小格子厚板、白大口、水衣、緞子腰帶、尉扇、サラヘ。

後シテ（住吉明神）
面邯鄲男、黑垂、透冠、赤地金緞鉢卷、襟淺黃又は紺、着附紅白段厚板、白大口、袷狩衣、紋附腰帶、神扇。

ツレ（姥）
面姥、鬘、姥髮、無紅鬘帶、襟朽葉、着附姥着箔、水衣萠黃淺黃又は縹、無紅唐織、杉箒。

ワキ（神主友成）
大臣烏帽子、赤上頭掛、着附厚板、白大口、袷狩衣、紋附腰帶、扇。

ワキツレ（從者二人）
大臣烏帽子、萠黃上頭掛、着附厚板、白大口、赤袷狩衣、紋附腰帶、扇。

高砂（タカサゴ）

正月

前ツレ　姥（松の精）
前シテ　尉（松の精）　後シテ　住吉の神
ワキ　神官友成

ワキ次第上（清ク確リ）（三人）ツヨク（拍子合）
今を初めの旅衣。今を初めの旅衣。日も行く末ぞ久しき

ワキ詞（健ニ）
そもそも是は九州肥後の國。阿蘇の宮の神主友成とは我が事なり。われいまだ都を見ず候程に。此度思ひ立ち都に上り候。又よきついでなれば。播州高砂の浦をも

（見ず候ふ程よ　トモ）

一見せばやと存じ

道行上（淀マズ勢ヨク）

旅衣。まはるゞの
都路を。まはるゞの都路を。けふ
思ひたつ浦の浪。船路長閑けき春風の
幾日きぬらん跡末も。いさ白雲の遙ゞと。
さしも思ひし播磨潟高砂の浦に
着きにけり高砂の浦に着きにけり

シテ二人上 ツレ
眞ノ一声（拍子不合）

高砂の。松の春風吹きくれて。尾上の

鐘も響くなり 波は霞の磯がくれ。
音こそ潮の満干なれ 誰をかも
知る人にせん高砂の。松も昔の友な
らで過ぎこし世々は白雪の。積り
積りて老の鶴の。ねぐらに殘る有明の。
春の霜夜の起居にも松風をのみ聞き
なれて。心を友と。菅筵の思を述ぶる

ざありあり

下歌（拍子合）（氣ヲカヘテユッタリ）
音づれは松に言問ふ浦風の。落葉衣の袖そへて。木陰の塵をかかうよ木陰の塵をかかうよ

上歌（健ニ引立テ）
●處は高砂の。處は高砂の。尾上の松も年ふりて。老の波もよりくるや。木の下陰の落葉かくなるまで命ながらへて。猶いつまでか生の松。それも久しき。

（前ヨリ運ビテ）（シヅメル）

ツレ 名所かなそれも久しき名所かな・

ワキ詞（確リト）「里人を相待つ所に。老人夫婦来れり。いかにこれなる老人に尋ぬべき事の候

シテ（嚴カニ）「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ぞ

シテ「唯今木陰を清め候こそ高砂の松にて候へ

松とはいへ（トモ）

ワキ「高砂住の江の松に相生の

名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに。

何とて相生の松とは申候ぞ

シテ（急カズニ確リ）仰の如く古今の序に。高砂住の江の松も。あひおひのやうに覺えとありさりながら。此尉は津の國住吉の者。これなる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申させ給へ

ワキカヽル上（カミツテ）（拍子不合）ふしぎや見れば老人の。

夫婦一所(イッショ)にありながら。遠(トオ)き住の江
高砂の。浦山國を隔(ヘダ)てゝすむと。いふハ
いかなる事やらん　ツレ〽(サラリト)うたての仰(オオセ)ぞや。
山川萬里(サンセンバンリ)を隔(ヘダ)つれども。たがひに通(カヨ)ふ
心づかひの。妹背(イモセ)の道ハ遠(トオ)からず
シテ甘(ドッシリ)〽まづ案(アン)じても御覧(ゴラン)ぜよ　シテツレ二人カヽル上(健ニ運ビ)高砂住の
江の。松ハ非情(ヒジョウ)のものだにも。相生(アイオイ)の名ハ

あるぞかし。ましてや生ある人として。年久しくも住吉より。通ひなれたる尉と姥は。松もろともに此年まで。相生の夫婦となるものを

「いはれを聞けば面白や。偖ゝさきに聞えつる。相生の松の物語を。所に言ひ置くいはれはなきか

「昔の人の申しゝは。

これはめでたき世のためしなり

ツレ上（サラリト）高砂といふは上代の。萬葉集の古への義

シテ詞（確リト）住吉と申すは。今此御代に住み給ふ延喜の御事

ツレ上 松とは盡きぬ言の葉の

シテ詞 榮は古今相同じと。

シテツレ上（健ニ）御代を崇むる喩なり

ワキ（サラリ）よく〱聞けばありがたや。今こそ不審春の日の

シテ「（漸次ニ詰メ合ヒテ）光（ヒカリ）やや和らぐ西の海の　ワキ「かしこは住の江

シテ「こゝは高砂　ワキ「松も色添ひ（イロソイ）　シテ「春も

ワキ「長閑（ノドカ）よ　地上歌（特ニ氣ヲカケテ）（拍子合）●「四海（シカイ）浪（ナミ）靜（シヅカ）にて。國も治（ヲサ）

まる時つ風。枝（エダ）をならさぬ御代（ミヨ）なれや。

あひに相生の。松こそめでたかりけれ。

げにや仰（アオ）ぎても事もおろか（オロカ）やかゝる世に。

住める民とて豊（ユタカ）なる。君の恵（メグミ）ぞありが

たき君の恵ぞありがたき。ワキ詞（確リト）なほ〳〵
高砂の松のめでたきいはれ委しく
御物語り候へ　地（拍子不合）打掛　クリ上（弛ミナク運ビテ）それ草木心なしとハ
申せども花實の時をたがへず。陽春
の徳を具へて南枝花始めて開く
シテサシ上（健ニサラリ）然れども此松ハ。其氣色とこしなへよ
して花葉時をわかず　地（サラリ）四の時至り

●獨吟
サシクセ
●囃子切迄

ても。千年の色雪のうちに深く。又は
松花の色十廻りとも云へり　かゝる
たよりを松が枝の　言の葉草の露
の玉。心を磨く種となりて　生きとし
生ける。物ごとに　敷島のかげによる
とかや。然るに長能が言葉にも。有情
非情の其聲みな歌にもるゝ事なし。

草木土沙。風聲水音まで萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き秋の蟲の北露になくも皆。和歌の姿ならずや。中にも此松は萬木に勝れて。十八公の粧ひ。千秋の緑をなして。古今の色を見ず。始皇の御爵にあづかる程の木なりとて異國にも本朝にも

萬民これを賞翫して。高砂の。尾上の
鐘の音すなり　曉かけて。霜は置け
ども松が枝の。葉色は同じ深緑立ち
寄る陰の朝夕に。かけども落葉の
盡きせぬは。眞なり松の葉の散り失
せずして色は猶眞拆のかづらながき
世のたとへなりける常盤木の中にも

名は高砂の。末代のためしにも相生の松ぞめでたき・

ロンギ上（氣ヲカヘテサラリト）

げに名を得たる松が枝の。げに名を得たる松が枝の。老木の昔あらはして。其名をなのり給へや

シテ上（健ニ）ツレ

今は何をかつゝむべき。これは高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ来りたり

地上（サラリ）

ふしぎや偖は名所の。松の

奇特を現して　草木心なけれども
地 畏き代とて　土も木も　地 我が大君の
國なればいつまでも君が代に住吉に。
まづ行きてあれにて待ち申さんと。
夕波の汀なる海士の小舟うち乗
りて。追風にまかせつゝ沖の方に出で
にけりや沖の方に出でにけり

けりや。(ヤ)トモ

中入

囃子
待謡ヨリモ

ワキ上歌（長閑ニ滞リナク）

待謡（三人）（拍子合）打切ヤ

高砂や。此浦舟に帆をあげて。打切 此浦舟に帆をあげて月もろともに出汐の。波の淡路の島影や。遠く鳴尾の沖過ぎて。はや住の江に着きにけりはや住の江に着きにけり

後シテ上 出端（拍子不合）（剛健ニ弛ミナク）

われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松幾代経ぬらん。睦ましと君は知らずや瑞垣の。

経ぬらん トモ

久しき代々の神かぐらの。よるの鼓の
拍子を揃へてすゞしめ給へ。宮奴たち
地上 西の海。檍が原の浪間より　シテ あらはれ
出でし神松の。春なれや。残んの雪の
浅香潟　地 玉藻刈るなる岸陰の
シテ 松根によつて腰を摩れば　地 千年
の翠。手に満てり　梅花を折つて

●獨吟仕舞

頭に挿せば　地　二月の雪衣に落つ

ロンギ上（健ニサラリ）（拍子合）ありがたの影向や。ありがたの影向や。

神舞　打上　諷頭打切　月住吉の神遊。御影を拝むあらた

さよ・シテ上（確リ）げにさまざまの舞姫の聲

も澄むなり住の江の。松影も映る

なる。青海波とはこれやらん　地上　神と君

との道すぐに。都の春に行くべくは

シテ それぞ還城樂の舞 地 さて萬歳の

シテ 小忌衣 地 さす腕には。惡魔を拂ひ。

をさむる手には。壽福を抱き。千秋

樂は民を撫で。萬歳樂には命を

延ぶ。相生の松風。颯々の聲ぞたの

しむ颯々の聲ぞたのしむ。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、返送料を添へて發行所へ送附せられゝば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せずして一揃の五番綴謡本を得らるべく候

版權所有

大正十四年六月二十五日印刷
大正十四年六月三十日發行

大正版 一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區東松下町十二番地 鈴木彌作
印刷所 東京市神田區東松下町十二番地 信英堂印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話九段二三〇五、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

飼

觀世流改訂謠本

内 一

五番目

鵜飼

五月

前シテ　鵜使の霊　後シテ　閻王
ワキ　日蓮上人
ワキツレ　従僧

ワキ詞
これは安房の清澄より出でたる僧にて候。われ未だ甲斐の國を見ず候程よ。此度甲斐の國行脚と志して候

サシ上 ヨワク
行く末いつと白浪の。安房の清澄立ち出でゝ。六浦のわたり鎌倉山

上歌 ワキ ワキツレ二人
やつれ果てぬる旅姿。やつれ果てぬる

旅姿捨つる身なれど恥ぢられぞ。一夜假寝の草筵。鐘を枕のよそに聞く。都留の郡の朝立つも日たけて越ゆる山道を過ぎて石和に著きにけり過ぎて石和につきにけり

鵜舟にともす篝火の。後の闇路を。いかにせん　げにや世の中を憂しとて

思ひ捨つべきよ。其心更に夏河に。鵜つかふ事の面白さに。殺生をするはかなさよ　傳へ聞く遊子伯陽は。月に誓つて契をなし。夫婦二つの星となる。今の雲の上人も。月なき夜をこそ悲み給ふに。われはそれに引きかへ。月の夜ごろを厭ひ。闇になる

夜を悦べど　鵜舟にともす篝火の
消えて闇こそ悲しけれ　つたな
かりける身の業と。つたなかりける
身の業と。今は先非を悔ゆれども。
かひも浪間に鵜舟こぐ。これほど惜しめ
ども。かなはぬ命繋がんとて。営む
業の物憂さよ営む業の物憂さよ

付

いつものごとく御堂にあがり鵜を休めうずるまでは。や。これは往来の人の御入り候よ

ワキ「さん候往来の僧にて候が。里まで宿をかり候へども。禁制の由申候程に。さて此御堂にとまりては

シテ「げに〳〵里まではお宿参らせうずる者は。覺えずて候

ワキ「偖御身はいかなる

使ひ候 トモ

へまでおわたり候ぞ　シテ「さん候これハ鵜使
まで候が。いつも月の程ハこの御堂ま
やすらひ月の入りて鵜をも使ひ候　ワキ「偖ハ
苦しからぬ人まで候ぞや。見申せバ
はや拔群に年たけ給ひて候が。かゝる
殺生のわざ勿體なく候。あはれこの
業を御とまりあつて。餘の業にて

身命をつぎ候かし　シテ「御尤にて候へども。若年より此業にて身命を扶かり候程に。今更止るべうもなく候。

ワキヅレ「いかに申候。此人を見て思ひ出したる事の候。此二三年前に。此川下岩落と申す処を通り候ひしに。かやうの鵜使に行き逢ひ候程に。

科の中の殺生のよしを申して候へば。げにもとや思ひけん。我が家につれて帰り。一夜けしからず攝して候ひしよ

シテ「さては其時の御僧にてわたり候

ワキヅレ「さん候其時の僧にて候

シテ「のう其鵜使こそ空しくなりて候へ

ワキ「それは何故空しくなりて候ぞ

シテ「恥かしながら此業

みて空しくなりて候。其時のありさま
語つて聞かせ申すべし。後をも弔らうて
御やり候へ　ワキ　心得申し候　シテ語　抑この石和
川と申すハ。上下三里が間ハ固く殺生
禁断の所なり。今仰せ候岩落邊に
鵜使ひ多し。夜な／＼此處に忍び
上つて鵜を使ふ。憎き者のしわざ

かな。かれらを見あらはさんと計みしよ。それをば夢にも知らずして。又ある夜忍び上つて鶏を使ふ。狙よくゞだつて寄り。一殺多生の理よまらせ。かれを殺せといひあへり。其時左右の手を合せ。かゝる殺生禁断の所をも知らざり。向後の事をこそて心得すべけれ

そて。手を合せ歎き悲めども。助くる人も浪の底に。罧に去給へと叫べど聲が出でばこそ。其鵜使の亡者にて候

ワキ「言語道断の事にて候。さらぬだに罪障懺悔に。業力の鵜を使うて御見せ候へ。跡をとひてねんごろに弔ひ申候べし

シテ「あらありがたや。さらば業力の鵜をと

使うて御目にかけ候べし。跡を弔うて

給はり候へ　ワキ「心得申候　シテ「さても

此夜も更け過ぎて。鵜使ふ頃にも

なりしかば。いざ業力の鵜を使はん

ワキカヽル上「これは他國の物語。死したる人の

業よりも。かく苦しみの憂き業を。

今見る事のあさましさよ　シテ詞「湿る

●仕舞獨吟 鵜の段

焚松ふり立てゝ　ワキ上 藤の衣の玉襷

シテ向 鵜籠を開き取り出だし　ワキ上 島津巣

おろし荒鵜ども　シテ向 此川波にばつと

放せば　地上 面白のありさまや。底にも見

ゆる篝火に。驚く魚を追ひまはし。

かづき上げすくひ上げ。隙なく魚を

食ふ時は。罪も報も後の世も忘れ

はておもしろや。漲る水の淀な
らば。生池の鯉やのぼらん玉嶋河に
あらねども。小鮎さばしるせゞらぎに。
かだみて魚はよもためじ。ふしぎやな
篝火の。燃えても影の暗くなるは。
おもひ出でたり月になりぬる悲し
さよ。鵜舟の篝影消えて。闇路に

帰る此身の名残惜しきをいかにせん名残惜しきをいかにせん。

中入

ワキ ワキヅレ上歌 待謡 ツヨク

「河瀬の石を拾ひあげ。河瀬の石を拾ひあげ。妙なる法の御経を一石に一字書きつけて。波間に沈め弔はゞ。などてか浮まざるべきなどてか浮まざるべき

後シテ上 早笛

「それ地獄遠きにあらず。

眼前の境界。悪鬼外に無し。そも〱
或者若年の昔より。江河に漁つて
其罪おびたゝし。されど鐵札がきてを
つくし。金紙をよごす事もなく。
無間の底に。堕罪すべかりしを。一僧
一宿の功力に引かれ。急ぎ佛所におく
らんて。悪鬼心をも和らげて。鷁舟を

弘誓の船になし。法華の法の助
け船。篝火も浮むけしきかな。地迷の
多き浮雲も。シテ實相の風あらく
吹いて。地千里が外も雲はれて。眞如
の月や出でぬらん。ありがたの
御事や。奈落に沈む悪人を。佛所に
送り給ふなる。其瑞相のありがたさよ

●シテ上「法華は利益ふかき故。魔道に沈む羣類を救はん為にあらはれたり 地上「げにありがたき誓かな。妙の一字はさていかに シテ「それは褒美の詞にて。妙なる法と説かれたり 地「經はなどや名づくらん シテ「それ。聖教の都名にて 地「二つもなく シテ「三つもなく 地上「唯一乗の徳によ

よりて。奈落に沈みはてゝ浮みがた
き悪人の。佛果を得ん事は此經の
力ならずや　これを見彼を聞く時は。
これを見彼を聞く時は。たとひ悪人
ありとても。慈悲の心をさきとして。
僧會を供養まするならば。その結縁
によりつゝ。佛果菩提に到るべし。

げよ往来の利益こそ。他を助くべき
力あれ他を助くべき力あれ。

文學博士 井上頼圀本文監修
丸岡桂本文訂正
観世清之節附訂正

使用家の特権

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別格組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、返送料を添へて發行所へ送附せられれば、装り形は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

稽古摘要

習ひたる師匠	始めたる年月日	終りたる年月日	稽古	感想
	大正　年　月　日	大正　年　月　日		

著作権所有

大正七年十月三十日印刷
大正七年十一月六日發行

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

大正版 一番綴

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會

去書